

「九州ドイツ文学」第13号別冊
平成十一年十一月二十五日発行

ハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』

石川栄作訳

ハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』

石川 栄 作 訳

第一幕^(一)

伝令官（入って来て、語る）

誉れ高き、気高き、選り抜きの客人方、
敬愛すべき殿方そして淑やかな婦人方に

至福と幸福がありますよう。

皆様方には素晴らしき物語を

お聴きご覧になって、

よく記憶にとどめていただきたい。

ジークムント王と呼ばれた

ニーダーラントの国王の物語を。

国王には息子が一人いて、名をゾイフリートといった。

息子はまったく無礼きわまりなく、

礼節、美德そして理性を具えておらず、

粗野で、腕力強くて手に負えない。

彼は荒れ果てた森の中で自らの手で

一匹の竜を打ち殺し、それを焼いた。

竜の角質はそのあと溶け出して、

火の中から小川のように流れ出てきた。

それをゾイフリートは自分の手足に塗ったが、

角質が再び冷えると、

彼の皮膚はそのためにつきり角質となった。

ライン河畔ヴルムス^(二)のギービツヒ王には、

一人の優しい娘がいて、名をクリームヒルトといった。

この娘を一匹の乱暴な竜が

このうえなく高い山の上へ連れ去った。

不死身のゾイフリートはそのあとを追いかけた。

そこである侏儒^(三)が彼に教えた通り、

一人の巨人が住んでいた。

彼はその巨人を四度目に打ち負かし、

しまいには谷底へ突き落とした。

そのあと初めて彼は竜と戦い、

苦勞の末、竜を倒して押さえつけた。

(一〇)

(五)

(二)

(二五)

(二〇)

(二五)

(三〇)

彼は乙女を故郷へ連れ帰り、
彼女と盛大な結婚式を挙げた。

その後、優しいクリームヒルトによって

ライン河畔ヴルムスのバラ園へ招待されたのは、
デイトトリヒ・フォン・ペルン⁽³⁾である。

(三五)

彼は喜び勇んでそこへやって来て、
不死身のゾイフリートと闘った。

彼は真剣に闘い、恐怖を味わうが、

その師匠ヒルトブランド⁽⁴⁾の策略によって

(四〇)

決闘でゾイフリートを打ち負かした。

クリームヒルトが夫の命乞いをする、

デイトトリヒ・フォン・ペルンは怒りを解いた。

ところが、彼女の兄弟たちが理性のない嫉妬から、
やがてある泉のほとりで、眠っている

(四五)

義弟ゾイフリートを刺し殺した。

それに対してクリームヒルトはひどい復讐を誓った。

以上のすべての出来事がいかに起こったか、

皆様方はきちんとこの場所で

劇の中で聞いて知ることでしょう。

(五〇)

ですから、じっと静かにしてくださいませよう、
お願い申し上げます。

(伝令官は立ち去る)

ニーダーラントのジークムント王(二人の顧問官とともに

入って来て、悲しげに腰を下ろして、語る)

親愛なるお前たちよ、助言をしてくれ。

神は私に、後継者となるべく、

一人の息子を授けてくれた。

ところが、息子はそれにふさわしくなく、

まったく高貴な性格ではない。

驕も美徳も持ち合わせていない。

厚かましく、大胆で乱暴だ。

腕力強く、粗暴で、不当に振舞う。

礼儀作法をまったく身につけようとしなのだ。

(六〇)

彼の気持ちと欲望はすべて

粗野で、乱暴なものだけに向けられている。

打ちのめしたり、走り回ったり、格闘したり、

そして国から国へと

まるで放浪者のようにさまよっている。

(六五)

そのような粗暴なものへと彼の意識は向けられているのだ。

第一の顧問官デイトトリプ(おじぎして語る)

しばらく彼を旅立たせ、

国をあちこち見て回らせなさい。

異国を訪問させ、旅して回らせるのです。

彼はまだ年が若いですし、

洗練されてもいないし未経験ですから。

彼に異国で何かを始めさせるのです。

異国はよき美徳と習慣を教え、

若者に抑制をもたらしましょう。

(七〇)

彼に好き勝手をさせないで、

ひんばんに若者をしつけさせるのです。

そうすれば、故郷にいるときよりもずっと

腕白さや悪習は若者から取り除かれましょう。

第二の顧問官ホルトリープ（語る）

そうです、あなたの王子ゾイフリート様は

それを望んでいらっしゃるのですから、

あなたはそうさせるべきです。

どこかフランスへでも、

あるいはスペインへでもすぐに行かせなさい。

そこでは宮廷も違ったふうに見え、

騎士や貴族たちが皆、

競馬、突き合い、槍試合や

狩猟及び娯楽等で

いかに宮廷生活を営んでいるかが分かりますようにし、

それが王子様の気にも入り、

それによって王子様は粗野な面から目覚め、

おとなしく、上品にもなられて、

国王の子息にふさわしい人物となりましょう。

ジークムント王（語る）

では、お前たちの助言に従って、

息子を一人でライン河畔ヴルムスの

ギービツヒ王の宮廷に送ることにしよう。

そこだと息子はニーダーラントの

(七五)

我々の宮廷にいるようなものだ！

そこへ息子を送ることにしよう。

伝令官よ、ゾイフリートを連れて来てくれ！

（伝令官はおじぎをして立ち去り、王子ゾイフリートを連れて来る）

来て来る）

国王（語る）

(八〇)

ゾイフリート、わが愛しい息子よ、

我々はお前をこれからライン河畔ヴルムスの

ギービツヒ王のもとへ送ることにしよう。

そこへは百人の家来が

お前に伴ってついて行くようにしてやろう。

皆、気高く優れた者たちばかりだ。

そのうえさらに私はお前に宝石と貨幣を与えよう。

ほかの王子たちと同じように、

お前も先程挙げたその宮廷で

気高く上品に暮らせるように。

息子よ、さあ旅立つのだ。

王子ゾイフリート（語る）

父上、すぐにそうしましょう。

でも私はそのためには、父上が今言われたようには、

財産もお金も必要ではありません。

私は強くて、そのうえまだ若いのですから、

自らの手で十分獲得できましよう。

それで私は、父上の考えられるようには、

(八五)

(一〇五)

(九〇)

(一一〇)

(九五)

(一一五)

私について来る家来も必要ではありません。
私はむしろ自分に襲いかかってくる

三人の荒武者に会いたいほどです。

父上たちよ、私は一人で、

私の若い心が導くところへ行きましょう。

(一一〇)

国王(語る)

それでもやはり王家にふさわしいように

お前に護衛をつけることにしよう。

(彼らは皆、立ち去る。鍛冶屋と徒弟が入って来る)

鍛冶屋(語る)

今日は遅く起きてしまったな。

何から手がけようか？

(一二五)

今日はまず

車輪を修理しようか、

それとも粉屋のロバを切るための

刀を鍛えることにしようか、

それともまず第一に何をしようか？

(一三〇)

徒弟(語る)

親方、率直に申しますが、

我々はまず第一に鉄を切ることにしましょう。

我々の領主様が命じられたように、

我々はできるだけ大急ぎで今日中に

領主様の馬に蹄鉄を打ちつけなければなりません。(一三五)

鍛冶屋(語る)

では、火を起こすのだ。だが、ちょっと待て！

扉を叩いて、こちらへ入ろうとしているのは誰か、見て来い。

(ゾイフリートが扉を叩いている)

徒弟(語る)

私が行って、開けてきましょう。

親方、若い男ですよ。

ゾイフリート(入って来て、語る)

今日は、親方！私の願いを聞いてください。

鍛冶屋の徒弟はもうここでは必要じゃないですか？

(一四〇)

ねえ、私に仕事を与えてくれませんか？

鍛冶屋(語る)

よかろう、ちようどよいときに来てくれた。

お前が元気よく打って、

軽率でもなく、怠けたりもしないなら、

一日だけお前を試してみることしよう。

(一四五)

ゾイフリート(語る)

金槌を与えてください。私を試してください。

私が怠けたら、私を追い出してください。

鍛冶屋(彼に金槌を与えて、語る)

金槌を手にとって、叩き割ってみる。

そしたら我々はその鉄を打ちのめして棒にしよう。

(一五〇)

ゾイフリート(語る)

おやおや、なんて小さな金槌をくれるんだ？

大きな金槌を振り上げたいのだが。

(鍛冶屋は彼に大きな金槌を与える)

ゾイフリート (語る)

そう、これなら私の力を証明してくれよう。

(ゾイフリートは金敷にもすごい一撃を加える)

鍛冶屋 (語る)

おやおや、強すぎて何の役にも立たないよ。

ゾイフリート (語る)

怠けないで、元氣よく打ってみると、

言ったじゃないですか？

私が出たことをお前さんは嘆くなんて！

徒弟 (語る)

お前は正気ではないようだな。

ゾイフリート (語る)

待て、待て、それを思い知らせてやろう！

(そして金槌で親方と徒弟を打ちのめして追い出す。彼も

また立ち去る。二人はまた戻って来る)

鍛冶屋 (語る)

我々はこの徒弟をどうして片付けようか？

我々は彼に危うく命を奪われるところだった。

彼は本当に悪魔のような徒弟だ。

鍛冶屋の徒弟 (語る)

親方、よい忠告をしてあげましょう。

その徒弟を森へ行かせるのです。

ねえ、森の中には炭焼きの家があるでしょう。

(一六五)

彼に籠を持たせて、籠いっぱいよい炭を
持って帰るよう命じるのです。

彼が森の中に入るや否や、

洞穴に棲んでいる竜が

すぐに彼を嗅ぎつけるでしょう。

竜は彼をただちに捕らえて、

尻尾で巻きつけ、

首を絞めて、口にのみ込むことでしょう。

こうして我々は彼をうまく片付けることができるのです。

鍛冶屋 (語る)

同じことをわしも考えていたところだ。

鍛冶屋 (叫ぶ)

徒弟のゾイフリートよ、入って来なさい。

ゾイフリート (語る)

どうして欲しいのか？ さっさと言うのだ。

鍛冶屋 (彼に籠を渡して、語る)

この籠を持って行って、あそこの森の中の

炭焼き人のところから炭を運んで来てくれ。

炭焼き人は山の麓の

藪の中の家に住んでいるから。

一緒に食事ができるよう、

できるだけ早く戻って来るのだ。

ゾイフリート (語る)

ええ、私に鷲の翼があったら、

(一八〇)

(一七五)

すぐに戻って来られましょう。

(一八五)

(ゾイフリートは籠を手に取って、立ち去る)

鍛冶屋(語る)

決して二度と戻って来るな!

お前の生命は森の中で

有毒の竜によって奪い取られるのだ。

鍛冶屋の徒弟(語る)

親方、出かけて行って、

遠くから眺めることにしましょう。

我々が安心していられるよう、

竜がいかにして彼をのみ込んでくれるかを。

(彼らは二人とも立ち去る)

(一九〇)

石川栄作

第二幕

ゾイフリート(籠を持ってやって来て、あちこちと歩き回り、独り言を言う)

(二二〇)

森の中をあちこち探してみたが、

炭焼き人は見つからない。

あそこの藪の中に

(一九五)

陰気で、深い、岩の洞穴があるぞ。

炭焼き人は恐らくあの中に住んでいるのだろう。

あそこへ行くことにしよう。

ゾイフリート(出かけて、洞穴の中を窺う。竜が彼に襲い

かかる。彼はまず籠で、そのあと剣で身を護る。互いに駆り立てる。竜は逃げる。両者とも走り去る。外でゾイフリートは煙を立て、竜を焼き焦がす。そのあと再び入って来て、語る)

大きな幸運と言うべきではなからうか?

私は大きな怪獣を打ち殺し、

その後、木の枝とともにそれを焼き焦がした。

するとしまいには竜の角質が

溶けて、どっと流れ出てきた。

まるで泉から小川が流れ出すかのように。

私は心の中で不思議に思い、

一本の指をその中に浸してみた。

すると指が冷えると、

私の指はまったく角質となったのだ。

(二〇五)

私はうれしくなって、ただちに

身体からすべての衣服を脱ぎ取って、

つまり大胆にも裸になって、

この熱い角質を塗りつけたのだ。

そのため私はすぐに前後の

皮膚がすっかり角質となって、

どんな剣もその上を突き刺すことはできないのだ。

(二二五)

私のような男はこの世にはいないだろう。

それゆえ私はもうこれ以上

鍛冶屋で人生を送るつもりはない。

私は粗暴な振舞いをやめて、

宮廷の躰しやうを熱心に学ぶことにしよう。

(二二〇)

ヴルムスの宮廷へ、最も近い道を辿って、行くことにしよう。伝え聞くところによると、

国王には美しくて優しい娘が一人いて、

クリームヒルトといい、まったく愛らしい乙女だという。

(二二五)

その乙女を私が貰い受けることができたら、私は心の底からうれしく思うのだが。

(ゾイフリートは立ち去る)

ギービツヒ王(伝令官とともに入って来て、腰を下ろして、語る)

伝令官よ、婦人部屋へ行って、

わが愛しい娘クリームヒルトに、

ここまで来るよう言ってくれ。

私は今娘に会いたいのだ。

(二三〇)

(伝令官は立ち去る)

ゾイフリート(やって来て、お辞儀をして語る)

偉大な国王様、私は

國中あちこち駆け回りましたが、

あなたの宮廷の賞賛をよく耳にいたしました。

そのため私は心から

あなたの宮廷に仕えたいと願っています。

(二三五)

ギービツヒ王(語る)

噂通りのものがご覧になれよう。

ところで君はどのような宮廷の躰しやうを受けたのかね？

不死身のゾイフリート(語る)

国王様、私は戦闘に出かけたり、

怪物や人々と戦ったりすること

以外には何もできません。

誰もが窮地に追い込まれるほど、

私は勇敢で、大胆で、怯みません。

(二四〇)

ギービツヒ王(語る)

君は気高い血筋の出身でもあるのかね？

不死身のゾイフリート(語る)

不死身のゾイフリートというのが私の名前。

素性と気高さにおいては

申し分なく、不足はないけれども、

私はここではまだ知られていないでしょう。

(二四五)

ギービツヒ王(語る)

では、君が誠実に私に奉仕するあかしに、

手を差し出しなさい。

君の奉仕が後悔なきようにしてあげよう。

不死身のゾイフリート(手を差し出して、語る)

(二五〇)

私はできる限り、私の奉仕を

きわめて誠実に為し遂げましょう。

(伝令官は国王の娘クリームヒルトを連れて来る)

クリームヒルト(語る)

心から愛するお父上様、

なぜ私をここへ呼び出したのでしょうか？
父上の意志と望みは何でしょうか？

(二五五)

ギービツヒ王（彼女の父、語る）

わが娘よ、私のそばにすわりなさい。
お前を喜ばせ樂しませるために、
ライン河畔ですべての貴族を集めて
槍試合を催す布令を出したところだ。

そこで私も自ら、

(二六〇)

ライン河が流れている緑の野原へ

出かけようと思う。

お前はこの城に残って、

貴族が槍試合を行うさまを、

あそこの上の胸壁から眺めていなさい。

(二六五)

石川栄作

そして君、ゾイフリート殿も準備をして、
騎士の誇りのため、

ほかの貴族と槍試合をし給え。

わが愛しい娘を称え、

彼女に喜びと樂しさを与えるために。

(二七〇)

不死身のゾイフリート（語る）

国王様、喜んでそういたしましたよう。

でも私は槍試合の武器を持っておりません。

槍試合で突き刺したり、駆けたりするために、

馬と鎧と楯、それに槍をお与えください。

ギービツヒ王（語る）

ゾイフリート殿、来なさい。願いを叶えて、
馬と鎧と槍を与えて進ぜよう。

(二七五)

（国王はゾイフリートとともに立ち去る）

クリームヒルト（国王の娘、語る）

あの方は若くて、勇敢な英雄。

私の目の保養になるお方だわ。

槍試合で神が彼に幸運を与え、

騎士の誇りという点で

(二八〇)

誰よりも抜きん出て、

最高の感謝が彼に与えられますよう。

私は心静かに立って、

一人で槍試合を眺めることにしましょう。

（そのとき竜がそこへ飛んで来る）

クリームヒルト（それを見て、語る）

神様、何と恐ろしい怪物が

(二八五)

身の毛もよだつ姿でこちらへ飛んできたことでしょう。

とても大きくて恐ろしい怪物です！

口からは火を吐き、

空から舞い降りて来て、

地上へ向かって身体を揺さぶりながら、

(二九〇)

城の胸壁にいる私の方へ急いで来ています。

助けて、神様、お願いです。

（竜はやって来て、彼女の手をつかみ、急いで彼女を連れ

去る）

彼女（叫ぶ）

お父様にお母様、神のご加護がありますよう！

私は無残にも死へと向かっています。

あなた方はもはや私に生きては会えないでしょう。（二九五）

神のご加護がありますよう。歎び、富裕そして名譽、

それらすべてを私は失ってしまうのです。

私はどこへ連れ去られるのか分かりませんから。

（竜は乙女を連れ去る）

国王（ゾイフリートと伝令官とともに走ってやって来て、

手を頭にあてて、語る）

ああ悲しや、悲しや！

私は二度と楽しくはなるまい。（三〇〇）

娘を失ってしまったのだから。

この世で私に楽しいことは何もあるまい。

娘が竜に連れ去られたのだ。

竜は娘を口の中にのみ込んでしまうだろう。

娘が空高く連れ去られるのを目にしたとき、（三〇五）

娘の嘆き声が私の心臓に突き刺さったが、

私は娘を助けられずに、

とうとう竜は娘を連れ去ってしまった。

もはや娘に生きては会えないだろう。

伝令官（語る）

誉れ高き国王様、私の名譽にかけて思いますに、（三二〇）

御姫様の生命にかかわることは起こっておりません。

竜はひとまず彼女を連れ去っただけです。

ゆっくりと、まったく丁重にそして静かに

空を通ってその恐ろしい竜は、

オリエントの方へ高く飛んで行って、（三一五）

広大な荒野へと辿り着いたのです。

私は本当に信じておりますが、その荒野の中で、

無理やり彼女を連れ去った竜とともに、彼女が

元気で健康な姿で暮らしているのが見つけられましょう。

ギービツヒ王（語る）

わが伝令官よ、すぐに宮廷に（三二〇）

通達しなさい。姫を探しに

出かけてくれる者で、

もし姫をこの竜から

生きて健康のまま救い出すことができれば、

そのときにはわが最愛の娘を（三二五）

その者の妻にしてあげようと。

不死身のゾイフリート（語る）

国王様、それ以上おっしゃらずに。

私が身体と生命を賭けて、

自らオリエントの荒野へ

出かけて行って、そこで（三三〇）

有毒の邪悪な竜と戦い、

姫を竜から救い出して、

姫を破滅から解放してあげましょう。

さもなくば私は自ら死ぬ覚悟です。

どこで竜を探したらよいか、

(三三五)

私はそのことをよく知っています。

というのも、竜は山のように高い

荒野へ飛んで行ったのですから。

そこへ私は急いで行って、

すべて平穩無事に解決してみせましょう。

(三四〇)

神が私を護ってくれることを望んでいます。

ギービツヒ王（語る）

神が君に至福と幸運を与えて、

君は竜を打ち倒して、

敬虔で正直なわが娘を連れて

無事にまた戻って来てくれますよう。

(三四五)

（彼らは皆、立ち去る）

第三幕

（竜は乙女を連れて来る）

彼女（すわって泣き、両手を絡ませ、悲しそうに語る）

神よ、天上で嘆いてください。

王家の娘である私は、

これから幾日も

泣いたり嘆いたりしながら、私の若い人生を

この山の上で過ごさなければならぬのです。

(三五〇)

楽しみも喜びも名誉もなく、

汚らわしい有毒の竜とともに

この寂しい荒野で過ごし、

私は動物にも人間にも会えないのです！

ああ、今日から永久になんと悲しいこと！

(三五五)

私の兄弟が私のことを知ってくれたら、

各人が生命を賭けて、

私を竜から開放してくれるのに。

でも私の言っていることは不可能なこと。

いっそ私は死ねないものか！

(三六〇)

ならば安らかに墓に横たわれるのに。

私は人生のいかなる瞬間にも

恐怖と心配に脅えていなければならないのです。

竜（語る）

気高い姫よ、元氣をお出し。

災いは起こりはしないから。

(三六五)

ただそなたはしばらくの間この岩山で

囚われの身となっていなければならぬだけだ。

しかしわしはそなたに何よりもまず

十分な食べ物と飲み物を持って来てあげよう。

(三七〇)

そしてわしは確かに

まったく突然だが、

再び一人の若者に変身することになっているのだ。

かつてわしは名前もついていて、

ギリシア国の王家の血筋の

生まれで、ある色事のために

怒りによって呪いをかけられ、

悪霊でもって、ご覧の通り、

竜に変身させられているのだ。

だから、クリームヒルトよ、不機嫌はやめてくれ。

(三八〇)

この期限が過ぎ去るまでのことだ。

そしたらわしはそなたにすべての償いをして、

権力と王家の支配権をそなたに委ねよう。

クリームヒルト（国王の娘、語る）

ああ、心からお願いします。

あなたの定められた期限の日が来るまで、

私を父のところへ連れ戻してください。

そしたら私は再びあなたのもとに

戻って来ます。それを誓います。

竜（答える）

駄目だ、駄目だ。わしはそなたを離しはしないぞ。

五年の歳月が経過するまで、

そなたはこの世で誰にも会えないのだ。

そなたがこの世で目にする

最初の男はこのわしだよ。

だから洞穴に入るのだ。

そなたはわしの囚人とならねばならないのだ。

(三九五)

(竜は彼女を連れ去る)

不死身のゾイフリート（武装してやって来て、自らに語り

かける）

今や私は四昼夜の間

歩き続けて、休息していない。

食べてもいないし、飲んでもいない。

心に思うことは、

竜が優しい国王の娘を連れて、

この峡谷を越えて

山の上へ飛び去ったことばかり。

この旅で神が私に味方してくれますよう！

山は信じられないほど高く、

そこへの道も見出されない。

あそこに一人の侏儒こびとがやって来るが、

あの男に山への道を教えてもらおう。

彼は立派な王冠を被り、

黄金をちりばめた豪華な衣裳も身につけ、

宝石もたっぷり持っている。

彼に近づいて、道を尋ねることにしよう。

侏儒オイグライン(5)（やって来て、語る）

やあ、今日は、不死身のゾイフリート殿。

大変難儀をしているようだね。

不死身のゾイフリート（語る）

ねえ、君は私の名前を口にしながら、

(四一〇)

(四〇五)

(四〇〇)

どこで私のことを聞き知ったのかね？

(四一五)

侏儒オイグライン（語る）

ゾイフリート殿、君のことはよく知っています。

君はニーダーラントの国王の息子で、

父の名前はジークムント王。

母の名前も私は知っていて、

ジークリンガがその美しい母の名前。

しかし、ゾイフリート殿、教えてくれ給え。

(四二〇)

この荒野で君は何を探しているのかね？

ここで私はこの三十年間、

人間の姿を見かけたことはないのだが。

忠告しておくが、いやな思いをしたくなければ、

君はこの山に近づいてはいけない。

というのも、山頂には一匹の大きな竜が棲んでいるから。

竜が君に気づいたら、君は死んでしまうよ。

竜は一人の姫、すなわち、

ライン河畔の国王の娘を連れ去って、

姫はあそこ高い岩山の上で暮らしているのだ。

竜が昼も夜も彼女をよく見張っているので、

彼女は決して救出されはしないのだ。

心底から彼女のことがあわれに思われてならない。

不死身のゾイフリート（語る）

彼女のために私はここにやって来たのだ。

その姫を私は救い出すつもりだ。

(四三五)

侏儒（語る）

気高い英雄よ、そんな言葉は口にしない方がよい！

逃げなさい。さもなければ君は死んでしまいますよ。

不死身のゾイフリート（語る）

お願いだ。乙女を救い出せるよう、

竜の岩山に通じている道を

私に教えてくれ給え。

(四四〇)

侏儒（語る）

おお、勇敢な英雄よ、

勇敢な心と戦う技術があっても無駄です。

竜の岩山の乙女は、

神以外には誰も助け出せないのです。

だからすぐに立ち去りなさい。心から忠告する。

君の若い身体が残念に思われてならない。

君の戦いは子供の遊びのようなものだから。

ゾイフリート（侏儒の髭をつかみ、もう一方の手で剣をつ

かんで、語る）

私に道を教えるのだ。さもなければ私は

君の頭を斬り落としてしまうぞ。

それをしかと言っておこう。

侏儒（語る）

わがゾイフリート殿、怒りをしずめてくれ。

君、選り抜かれた勇敢な英雄よ、

私は君に道を教えてやろう。

(四五〇)

しかしその前に鍵を入手しなくてはならない。
鍵はクペローンという名の巨人、

(四五五)

大きくて恐ろしい男のところにある。

その大男とも君は戦わねばならないのだ。

彼の強い力がその前にまず圧倒して、

彼は鍵を君に渡すことはないだろう。

誠実に忠告する。私について来なさい。

引き返して、君の若い生命を救うのだ。

(四六〇)

不死身のゾイフリート（語る）

彼が鍵を私に渡すようにしてやる。

彼は好きなように邪魔をするがよい。

一撃で彼を押さえつけて、

彼が私に恵みを乞うようにしてやる。

(四六五)

侏儒（語る）

君が巨人に打ち勝ったとしても、

君は次には竜と戦わねばならない。

竜は君を口の中にのみ込んでしまうだろう。

恐ろしい姿で飛んで、

その顎はまったく鉄のように堅く、

有毒の長い尻尾をもつけている、

そのような身の毛もよだつ怪獣を私は見たことがない。

それはまた極熱の火をも吐き、

それを前にしては君は身動きもできない。

君はその前で倒れ死なねばならないだろう。

(四七五)

不死身のゾイフリート（語る）

私は神に助けてもらって、

その竜に打ち勝ち、

美しい乙女を解放するつもりだ。

というのも、私は以前若いときにも

一匹の竜を打ち殺したことがあるし、

また二匹の竜を生け捕りにして、

その尻尾を壁の上に吊したこともあるのだ。

だから、どうか巨人のところへ行く道を教えてくれ。

そこで私は生命を失うか、

それとも勝利と至福を手に入れるかのどちらかだ。

優しい乙女が取り戻せたら、

私の生命のある限り、

彼女は私の妻となることになっているのだ。

侏儒（語る）

ゾイフリート殿、勇敢で若い男よ、

同じことを私も望んでいる。

しかし、私がこのように阻んだからといって、

私を咎めないでくれ。

こうしたのもまったくの誠実心からなのだ。

不死身のゾイフリート（語る）

後悔しないように、と私は望んでいる。

どうか私を巨人の住む洞穴へ連れて行ってくれ。

私は彼を押さえつけて、

(四九五)

(四八〇)

(四八五)

(四九〇)

私のために扉を開けるようにしてやる。

(彼らは二人とも立ち去る)

第四幕

巨人クペローン(大きな鍵を持っており、自分の上の天を仰ぎ、語る)

今日はひどい霧だな。

何と奇妙な霧なんだ？

竜は狂暴な姿で、

山のまわりをうろつき回り、

四方八方を見回して、

乙女を護り、見張っている。

わしはその鍵を持っているが、

それを誰にも渡しはしないぞ。

竜は今宵わしを

不安がらせて目覚めさせたが、

何もすることがないので、

また床につくことにしよう。

(巨人は立ち去る)

(侏儒とゾイフリートがやって来る。ゾイフリートは戦斧せんぼ)

で扉を叩く。侏儒は退く)

巨人クペローン(語る)

洞穴の扉を叩くのは誰か？

待て、待て、すぐ出るから。

巨人(鋼鉄の棒を持って出て来て、語る)

おい、若い奴、言ってみろ。

誰がお前をこの荒野へ連れて来たのか？

なぜわしの部屋の扉を叩くのか？

一撃をすぐに

わしからくろうことになるぞ。

不死身のゾイフリート(語る)

お前の一撃をくろうことなど私は望んでいない。

私が苛酷な生活から

優しい乙女を解放し、

邪悪な竜から救出できるよう、

おとなしく鍵を私に渡すのだ。

竜は彼女を不当に捕らえたのだ。

竜がギービツヒ王から娘を奪い去ってから、

およそ四年が過ぎ去った。

見よ、巨人よ、私がここへやって来たのは、

乙女を再び故郷へ連れて帰るためなのだ。

巨人クペローン(語る)

お前、若い厚かましい奴よ、そのことは黙っておれ！

そのようなことをするつもりなら、

お前は竜の岩山で戦う前に、

百度も地面に倒れることになるぞ。

立ち去れ。真心から言っておく。

(五〇〇)

(五〇五)

(五一〇)

(五一五)

(五二〇)

(五二五)

(五三〇)

お前の若い血はかわいそうにも不幸をもたらすことになるぞ。逃げよ。さもなければ罰を与えるぞ。

(五三五)

不死身のゾイフリート (語る)
いいか、巨人よ、私はやめたりしないぞ。お前が私に鍵を渡すまでは。

巨人クペローン (語る)

待て、待て、鍵は今与えてやろう。

赤い血がお前の頭の上を

流れ出すようにな。

(五四〇)

(巨人は鉄棒でゾイフリートを打ちのめそうとする。ゾイフリートはその一撃から飛び退き、剣を抜く。二人は互いに戦う。巨人は鉄棒を落として身をかがめる。ゾイフリートは巨人に一撃を与える)

巨人 (ゾイフリートを襲って、語る)

若い英雄よ、お前はわしの手により

無残にも死んでもらわねばならぬ。

不死身のゾイフリート (語る)

神の助けにより、お前自身が

地獄の底に落ちるのだ。

(ゾイフリートは再び巨人に攻撃を仕掛けると、巨人は鉄棒を落として、洞穴の中へ逃げ込む)

ゾイフリート (語る)

さあ、出て来て、身を防ぐがよい。

(五四五)

さもなければ、私が美しい乙女のところへ行けるよう、鍵を持って来い。

そうすればお前を痛めつけることはもうよそう。

巨人 (楯と兜と剣を持ってやって来て、語る)

若僧よ、鍵は与えてやろう！

だがお前は若い生命を終えねばならぬぞ。

それともわしはお前を生かしておいて、

一本の木に吊して、

いつまでもお前を罵り、あざ笑うことにしようか。

(五五〇)

不死身のゾイフリート (語る)

神が私をお前から護ってくれますよう！

神の助けで私は無事に自分を

悪魔の下僕たるお前から護れるものと思う。

お前は乙女を閉じ込めたのだから、

挑戦を受けるがよい。

(彼らは互いに打ち合い、ついに巨人は倒れて)

巨人 (叫ぶ)

ああ、英雄よ、わしの生命を助けてくれ。

そうすればわしはお前の捕虜となって、

楯と剣をも与えよう。

これらは一国に値するほどのものだ。

わしはお前の奴隷となるう。

(彼は両手を差し出す)

不死身のゾイフリート (語る)

(五六〇)

よかろう、巨人よ、私もそれを望む。

しかし、岩山の門を開けてくれ。

やさしい清らかな娘を

恐ろしい有毒の竜から

戦いで救い出すことができるよう。

(五六五)

巨人クペローン（語る）

そうしよう。その前に傷口の手当てをしてくれ。

お前が与えた傷が痛いから。

そのあとでお前と一緒に行く。

お前が次々にしてきたことを

今や許してやることにしよう。

(五七〇)

不死身のゾイフリート（彼の傷を布で包帯して、語る）

そうだ、それは私の望むところでもある。

（彼らは互いに手を差し出す）

巨人（彼にある場所を指さして、語る）

見よ、あそこかんぼくの灌木が見えるか？

あそこが岩山への門なのだ。

その中に一つの道が確かに通じている。

およそ八クラフターほど下へ行ったところだ。

まず我々は大きな門に辿り着くが、

その前には丈夫な鉄の錠前がある。

その錠前をわしは開けてやろう。

お前について行くから、わしの前を歩くのだ。

ゾイフリート（語る）

(五八〇)

私は心の喜びから

苦勞も骨折りをも厭わない。

優しい乙女を

わが目で見るためには。

(五八五)

（ゾイフリートは前を歩き、巨人はあとをついて行く。巨人は剣を引き抜いて、ゾイフリートを打ちのめす。侏儒が霧の頭巾をゾイフリートに投げかける。巨人はゾイフリートを突き刺そうとするが、彼を見ることができずに）

巨人（語る）

英雄はどこへ消えてしまったのか？

彼にひどい傷を与えたので、

彼はわしの足もとに倒れているはずだが。

まったく不思議なことだ。

彼をどこにも見出せないなんて。

彼を片付けてしまいたいのだが。

(五九〇)

（巨人はあちこち探す。侏儒はゾイフリートを起こす。彼は霧の頭巾を脱ぎ取ると、巨人に襲いかかる。彼は巨人と打ち合い、巨人はついに倒れる）

ゾイフリート（語る）

不実な男よ、今やお前は死なねばならぬ。

誰もお前に恵みを与えはしないぞ。

巨人クペローン（両手を差し出して、語る）

勇敢な勇士よ、わしの生命を助けてくれ。

わしを殺せば、お前は美しい乙女のことを

(五九五)

あきらめねばならぬぞ。わしを信用しろ。
わしなしでは誰も彼女のところへは行けないのだ。

ゾイフリート（語る）

私を駆り立ててきた乙女への愛のために

私はお前を生かしておかねばならぬ。

ただちに私の前を歩き、竜の岩山の

扉を開ける。我々が

優しい乙女のところへ行けるように。

乙女はそこで無慈悲にも捕らえられているのだ。

巨人（起き上がり、鍵を手に取り、語る）

徳高き若い男よ、

それを喜んでしてあげよう。

お前が高貴な家の出であることは分かった。

さあ、我々は二人で一緒に出かけ、

竜の岩山の扉を開けることにしよう。

それでお前とわしと小さな侏儒は

乙女のところへ行けようが、

階段がおよそ千段もある高さだ。

洞穴の山をあちこち登って行けば、

なんとかかうまく我々は、

乙女が惨めな姿で過ごしている

山の頂上に到着するだろう。

そして恐ろしい竜を待つのだ。

竜はすぐに山へ姿を現わすだろう。

(六〇〇)

竜は乙女に熱心にその爪でもって
飲み物や食べ物を運んでいるのだから。

不死身のゾイフリート（語る）

さあ、つべこべぬかさず、前を歩け。

そして我々がすぐに優しい乙女のところへ行けるよう、

山の門を開けるのだ。

彼女は解放されて、すぐに

両親のもとへ帰れるのを期待しているのだから。

(六一五)

私とその彼女の手助けとなるのだ。

そのために神も私を助けてくれますよう。

(彼らは三人とも立ち去る)

(六〇五)

第五幕

乙女クリームヒルト（入って来て、悲しそうにすわり、語る）

ああ、神は惨めであわれなこの私に

あわれみをかけてはくださらないのでしょうか？

私はこの荒野にとどまって、

若い日々を苦しみに晒し、

嫌な恐ろしい竜のそばで過ごさねばならないのです。

(六三〇)

竜は昼も夜も私を見張っているのだ、

私は夜も朝も竜に対して

生命のことを心配しなければなりません。

(六三五)

(六一〇)

この山の螺旋状の岩へ

一人で登って来る足音がするけど、一体誰かしら？

ここへは四年目に至るまで

本当にどんな人間も来たことはなかったのに。

(巨人クペローンは不死身のゾイフリートと侏儒を伴って入って来る)

乙女(十字を切って、語る)

ああ、ゾイフリート様、誰があなたをここまで

(六四〇)

連れて来たの？恐ろしい大きな竜を前にして

あなたの生命は危険に晒されています。

竜はすぐに姿を現わすでしょう。

今は昼間で太陽が輝いています。

だからすぐに逃げなさい。これが私の忠告です。

(六四五)

石川栄作

あなたの身に災いが生じたら、

私は一生涯それを後悔します。

だから逃げて、私の父と母に伝えてください。

私はいつまでも囚われの身でいなければならぬので、

私のことは断念されねばならないと。

(六五〇)

不死身のゾイフリート(語る)

姫よ、あなたに恵みがありますよう。

私はあなたを大きな竜から

神の助けでもって解放してあげるつもりです。

さもなくば喜んで死ぬつもりです。

巨人(剣が地面にあるのを彼に教えて、語る)

お前がここで賞賛を勝ち得るつもりならば、

あの剣を手にしなければならぬ。

この世でこの剣以外には

竜を傷つけうる武器はほかにはないのだ。

このことをお前に伝えておこう。

(ゾイフリートはその剣を取り上げようとして、身をかがめる。巨人は再び彼に襲いかかる)

ゾイフリート(剣を手にとって、語る)

ああ、嘘つき野郎、不実な男よ、

(六六〇)

お前の不誠実はどうにかならないものか？

さあ、今度こそお前は死なねばならぬ。

三度も誓いを破ったのだからな。

(乙女は両手を絡ませる。彼らは互いに打ち合い、ついに

巨人は倒れる)

ゾイフリート(巨人の片手をつかんで投げ捨て、語る)

およそ百クラフターもある

この山から落ちて、

(六六五)

千切れてバラバラになるがよい。

そしてありとあらゆる災いを被るがよい！

彼(乙女のそばにすわって、語る)

ああ、姫よ、もう安心してください。

今やすべてがよくなると思えますから。

四日目に至るまで何も食べずに、

(六七〇)

私は思い切って自分の生命を賭けたのです。

(侏儒は立ち去る)

乙女(語る)

ああ、あなたの到着を私は喜びます。

あなたが私のためにここまで来てくださり、
死の危険に身を晒さらしていることに對して、

私はあなたにすべての愛と誠実を捧げます。

(六七五)

今や、あなたによって神が私を

故郷へ帰してくださいれば、私はあなたに

結婚の約束をいたします。

鋼鉄のように堅い私の誠実を受け取ってください。

侏儒(菓子に入った黄金がね作りの皿を持って来て、語る)

逞しい英雄よ、私が推測するに、

(六八〇)

君は長いこと何も食べていないので、

力が君から抜けてゆくことでしよう。

そのため元氣づける菓子をここに持って

来ました。これで元氣を回復してください。

でも君は長いこと休んでゐるわけにはゆきません。

(六八五)

すぐこの山に姿を現わす竜と

君は戦わねばならないのだから。

(不死身のゾイフリートは少し食べる)

乙女(叫ぶ)

ああ、竜があそこの高い空から

音を立ててこちらへ向かっているのが聞こえるわ。

とても狂暴な恐ろしい竜で、

(六九〇)

口からは火を吐いているわ。

だから、氣高い英雄よ、すぐに逃げてください。

さもなければ、ご自身を防いでください。

侏儒(皿を手に取って、語る)

ああ、竜が来た。ここにはいられない！

竜のため冷や汗が出てきた。

(六九五)

私は竜に對してはあまりにも弱く小さいので、

洞穴へ逃げることにしよう。

乙女(語る)

わが英雄ゾイフリート様。さあ、あなたも

竜の吐き出す炎と煙から逃れて、

有毒の煙が消え去るまで、

(七〇〇)

私と一緒に身を隠してください。

(そこで三人は皆、逃げ去る)

(竜はやって来て、火を吐き、あちこち歩き回る。竜が攻

撃を止める否や、ゾイフリートは竜に襲いかかる。竜は彼

の楯を引き裂き、彼に襲いかかって、彼の上空を飛び回る。

ゾイフリートは起き上がり、竜を打ちのめすと、ついに竜

は倒れる。その竜をも彼は投げ落とすが、彼自身も失神し

て倒れてしまう)

乙女(やって来て、彼のそばにすわり、彼の頭を膝の上に

置いて、語る)

今や神に嘆かないではいられない。

あなたの魂は、疲労と失神のあまり、

失われてしまったのですから！

私のためにあなたは災いを被ったのです。

(七〇五)

侏儒（やって来て、ゾイフリートを見て、語る）

ああ、乙女よ、英雄は死んでいるではありません。

彼は失神して倒れているだけです。

彼はこの薬草を与えなさい。

そうすれば、彼は正気を取り戻すでしょう。

（乙女は彼に薬草を与える）

ゾイフリート（起き上がってすわり、語る）

ここはどこか、私には何が起こったのか？

(七一〇)

私はほとんど聞くことも見ることもできない。

乙女（彼を抱き締め、口づけをして、語る）

ゾイフリート様、元氣を出してください。

私はあなたによって救い出されたのです。

そのことでもいつまでも感謝と賞賛を！

侏儒（語る）

君は同じ方法で私や

(七一五)

山中にいる私の一族を救い出してくれたのです。

私は千人の侏儒たちの国王です。

巨人クペローンは私たちを制圧していたので、

私たちは彼に従わねばならなかったのです。

今や私たちもまた自由の身となったのです。

(七二〇)

神と君に賞賛と名誉がありますよう！

不死身のゾイフリート（立ち上がって、語る）

それでは、我々は立ち上がって、

ライン河畔ヴルムスの

あなたの父上ギーピツヒのもとへ急ぎましょう。

父上様は心から喜ばれることでしょう。

(七二五)

侏儒オイグライン（語る）

ゾイフリート殿、私は君にお伴をつけて、

この広い荒野から抜け出る

道を教えましょう。

この荒野には道が全然ないのです。

それから何日も経たないうちに

(七三〇)

ギーピツヒ王に君の到着を知らせましょう。

不死身のゾイフリート（語る）

かたじけない。では、我々は自由に

喜んで皆三人で一一緒に帰ることにしよう。

ところで、君は占星術を心得ているのだから、

誠実と好意から私に教えてほしい。

(七三五)

私はどうなるのか、凶か吉か。

そして私はどのくらい長く生きられるのか。

また私はどのような最期を迎えるのか。

侏儒（星を見て、語る）

天空は何もよいものを示してはいない。

ああ、勇敢な英雄よ、君はあわれだ。

(七四〇)

星が君に示しているところによると、

この乙女は君の奥方となるだろうが、

君は奥方のもとで八年しか生きられないのだ。
その後君は眠っているときに刺殺されるだろう。
しかしそのことで不実な暗殺者たちも
最後には復讐されることだろう。

(七四五)

不死身のゾイフリート(語る)

では、神が望む通りに、なるがよい。
よろしい！もうこれ以上ぐずぐずせずに、
ライン河畔のヴルムスへ帰ることにしよう。

(彼らは三人とも立ち去る)

ギービツヒ王(伝令官とともに入って来て、悲しそうにす
わって、語る)

(七五〇)

ああ、神よ、私はまったくあわれだ。
なぜなら、私は娘クリームヒルトを失って、
もう四年にもなるのだから。

娘は怪獣に連れ去られ、

私は恐らくはもう娘に会えはしないのだ。

そのことが私の妻をひどく悲しませ、

妻もまた悲しみのあまり死んでしまった。

だから私は二人を失ったことになるのだ。

侏儒オイグライン(やって来て、語る)

国王様、お喜びください！

あなたの姫君はゾイフリートによって

このほど竜から救い出されました。

姫君は元気で無事に戻って来られます。

(七六〇)

ギービツヒ王(語る)

これは、愛しい娘が生まれて以来、
聞いたこともないほど、

このうえなくうれしい知らせだ。

私が娘を出迎えられるよう、

ただちに馬具を持って参れ。

(七六五)

侏儒(語る)

国王様、わざわざ出かける必要はありません。

彼らはもう下の城庭に着いていて、

二人とも馬から降りています。

彼らは二人ともまもなく一緒に

この国王の広間においでになるでしょう。

(ゾイフリートはクリームヒルトを連れて入って来る)

(七七〇)

国王(彼らを出迎え、自分の娘を抱き締めて、語る)
よく戻って来た、わが娘よ！

なんと言葉にも言い表わせぬ大きな苦しみを

私はお前のために受けてきたことか。

そのためお前の母は死んでしまったのだ。

国王(ゾイフリートの手を取って、語る)

ゾイフリート殿、気高い英雄よ。

これから先、君はわが娘婿になってくれ。

君がヴルムスを出発するときに、

私が君に約束しておいたように。

話してくれ。君はわが娘を

(七八〇)

どのように、どこで見つけ、どのようにして
竜を退治したのかを。わが娘婿よ。

不死身のゾイフリート

それをたっぷりとお話しいたしましょう。

あなたは大冒険を聞くことになりました。

しかし、今は私たちは特に疲れていますので、

休まねばなりません。数日もしないうちに

私はどのような危険を冒して戦ったか、

一つ一つあなたにお聞かせいたしましょう。

またあなたの姫君が竜のもとで

四年間いかなる苦しみを嘗めたのかも、

姫君があなたにすべてお話することになるでしょう。

ギービツヒ王（語る）

では、よろしい。休み給え！

明日、我々は話を聞くことにしよう。

そして結婚式も執り行うことにして、

ライン河畔のすべての貴族、

婦人や乙女たちとともに、

快い喜びをかみしめることにしよう。

さあ、晚餐の部屋に入ってくれ給え！

（彼らは皆、立ち去る）

第六幕

（不死身のゾイフリートは妻クリームヒルトとともに入っ
て来て、一緒にすわる）

妻（語る）

ゾイフリート、心から愛するわが夫よ。

今や私はあなたのもの、あなたは私のもの。

今や誰も私たちを死別させはしない。

全能の神に祝福を。

神はあなたにとっても強い力を与えたので、

あなたはものすごい巨人クペローンに対しても

勝利を収め、

巨人を四度も打ちのめした。

あなたはまた竜にも打ち勝ち、

それによってあなたは私を

悲惨な牢獄から、恐ろしく

厳しく拘束された状態から自由にしてくれた。

教えて、どこからそんな勇敢な力をかち得たの？

不死身のゾイフリート（語る）

わがクリームヒルト、私の秘密を教えよう。

私は生まれつき十二人の男に匹敵するような

力を持ち、そのうえ奇抜な存在なのだ。

若い頃のことであるが、

私は一匹の竜を打ち殺し、

（八〇五）

（八一〇）

（八一五）

そのあとで竜を火で焼いた。

この恐ろしい竜から

角質が溶けて、小川のように流れ出した。

それを身体中に塗りつけると、

私の皮膚は角のように堅くなったのだ。

それゆえ私は、

巨人や英雄そして怪獣を相手にしても

闘争や戦いそして突進という点で勇敢なのだ。

この世で私に匹敵するような者はいまい。

王妃クリームヒルト（語る）

でも一人の気高い英雄について人は噂しているわ。

その英雄はヴェルシュラントのペルン（註）に住んでいて、

デイトトリヒという名前で、

彼もまた多くの勇士たち、

ファゾルト王やエツケ、

リュエツや巨人ジゲノート（註）などを殺したそうよ。

不死身のゾイフリート（語る）

その通り、それは本当だ。神にお願いして、

デイトトリヒ・フォン・ペルンがここに来ればよいのに。

私は彼と闘って自分の力を試してみたい。

彼が私の名誉を傷つけないことを私は望む。

王妃クリームヒルト（語る）

あなたが欲するなら、ここライン河畔の
ヴルムスへ招待させましょう。

（八二〇）

そのペルンの人と武術の師匠、
すなわち、老ヒルトプラントを。

彼は口と手に関しては策略家です。

彼はペルンの人に知識と教えを授けて、

ペルンの人に闘いで勝利を得させるのです。

不死身のゾイフリート（語る）

では、彼をバラ園へ招待してください。

そこで私は彼との決闘を待ち受けよう。

彼に書状を送れば、来ないことはないだろう。

勇敢な心と高慢さに駆り立てられて、

彼はその生涯においてしばしば

大きな危険に身を晒さらしてきたのだから。

王妃クリームヒルト（語る）

今すぐ彼のところへ

プラバント公爵を遣わせましょう。

公爵はその役目をきちんと果たしてくれましょう。

不死身のゾイフリート（語る）

そうしているうちに

例のバラ園を整えておくことにしよう。

いろいろと手を尽くして

家来どもに豪華な衣裳を身につけさせるので、

ペルンの人はすべてのものが王宮らしく
飾られているのを目にすることだろう。

王妃クリームヒルト（語る）

（八四〇）

（八四五）

（八五〇）

（八五五）

さあ、私の従兄弟プラバント公爵を
ヴェルシユラントのペルンへ
旅立たせることにしましょう。
あなたが決闘の相手に選んだ
この勇敢な英雄を迎えるために。

(八六〇)

(彼らは二人とも立ち去る)

ギービツヒ王(入って来て、すわり、語る)

私の娘と娘婿は

デイトリヒ・フォン・ペルンに

ライン河畔へ来るよう手紙を書いた。

(八六五)

それがよかったのかどうか、私は知らない。

ただ私はそれを実現させ、

そのために監視せねばならぬ。

事態はよいようには思われぬ。

高慢からは何もよいことは生じないのだから。

(八七〇)

(国王は立ち去る)

デイトリヒ・フォン・ペルン(武術の師匠、老ヒルトプ

ラントを伴って入って来て、語る)

聞いてくれ、わが武術の師匠ヒルトプラントよ。

王妃クリームヒルトは

プラバント公爵を使者として

ここへ遣わせた。彼女の望みは、

私がライン河畔のヴルムスへ出かけて、

(八七五)

私を待ち受けている彼女の夫

ゾイフリートとバラ園で

二人きりで闘ってほしいということだ。

どう思うか？私はそこへ出かけるべきだろうか？

老ヒルトプラント(語る)

おや、あなたはいつでも、

あなたの名声と賞賛を増やすために、

賞賛と名誉を求めて闘ってきたではないですか！

どうしてそれをやめようとなさるのですか？

急いで出かけなさい。

私自身も一緒について参りましょう。

(八八五)

ペルンの人(語る)

勧めるのなら、出かけることにしよう。

すぐに二頭の馬に鞍を乗せてくれ。

楯と兜と鎧そして剣を持って来てくれ。

我々は今日中にもライン河畔の

ヴルムスへ出かけることにしよう。

(八九〇)

(彼らは二人とも立ち去る)

クリームヒルト(ゾイフリートとともに入って来て、語る)

すべてのものがきわめてよく整えられました。

すぐに気高い客人たちが来てくださればよいのに！

あなた方二人がバラ園で

騎士らしく闘う時がくるのを

私はほとんど待てないくらいですもの。

(八九五)

あなたが闘いでペルンの人に打ち勝てば、

あなたの賞賛は全世界の
すべての英雄にもまして高められましょう。

不死身のゾイフリート（語る）

そうだ、私もそのような結果になることを望んでいる。
しかし、すべては神の御手の中にあり、
それゆえ勝利は運次第だ。

（九〇〇）

私は部屋の中へ入ることにしよう。

（不死身のゾイフリートは立ち去る）

ペルンの人（やって来て、彼を見送り、クリームヒルトに
近づいて、語る）

王妃様、あなたは私に手紙を書いて、
ペルンから私をヴルムスへ呼んで、
あなたの夫ゾイフリート王との
闘いを私に申し込まれた。

（九〇五）

それを勇敢に為し遂げるべく、
今ここにやって参りました。

クリームヒルト（彼の手を取って、語る）

ええ、気高きディートリヒ・フォン・ペルン殿、
この闘いで私は試したく思います。

（九一〇）

この世で最も勇敢な英雄は
あなたか、それとも私の貴い夫なのかを。

勝者には私によって
抱擁と甘い口づけ、

さらにバラの冠も与えられることでしょう。

（九一五）

ディートリヒ・フォン・ペルン（語る）
闘いを宣言しよう。

あなたのご主人に伝えてください。

クリームヒルト（語る）

ええ、勇敢な英雄よ、そういたしましょう。

（王妃は立ち去る）

ペルンの人（ヒルトプラントに語る）

今や誠実にかけて私は

決闘を承諾したのを密かに後悔している。

（九二〇）

ゾイフリートはすっかり不死身なのだから。
私はそのことを先程まで知らなかったのだ。
だから私は心から望むのだが、
再び故郷のペルンへ帰りたい。

老ヒルトプラント（語る）

おや、なんと恥ずかしい臆病な男か？

（九二五）

ゾイフリートに打ち勝とうとしないなんて！
それが国中で噂されれば、
あなたが国中で噂されれば、

あなたはひどい恥辱と侮辱を受けましょう。

あなたなどには出会わねばよかったものを！

ペルンの人（語る）

どうしてお前は私を罵り、侮辱するのか？

（九三〇）

私をそのように嘲笑し、罵るのだから、
私もお前にその報いを与えてやろう。

（ペルンの人は剣を引き抜いて、ヒルトプラントを打ちの

めし、怒って立ち去る)

ヒルトプラント(立ち上がって、語る)

私は主君を怒らせてしまった。

主君は私にひどい一撃を加えた。

私は理由なしでそれをしたのではない。

主君はそれによって闘いに勝つことができるのだ。

(ヒルトプラントは立ち去る)

王妃クリームヒルト(やって来て、すわり、語る)

私はバラの中にすわって

決闘を見物することにしませう。

ゾイフリート王(武装してやって来て、あちこち歩き回り、

そのあと語る)

なんと長く私はバラ園でディートリヒ・

フォン・ペルンを待たねばならないのか?

数々の闘いを乗り越えてきた

彼は臆病になったのではないか。

ディートリヒ・フォン・ペルン(やって来て、語る)

私は早くやって来たつもりだ。

さあ、ゾイフリートよ、準備をし給え。

ヒルトプラントも私を罵り、

私の手をくらったので、

私の前で打ちのめされて横たわったが、

お前もそのようになるのだ。

不死身のゾイフリート(語る)

お前は勇敢なら、私のところへ入って来い。
どちらが勝つか、やってみよう。

(そこで互いに闘う。ゾイフリートはペルンの人をぐるぐる回す)

ヒルトプラント(ひそかに眺め、静かに語る)

伝令官よ、行って知らせるのだ。

ペルンの人が私を打ち殺したということを。

伝令官(野原に入って来て、叫ぶ)

あなた方、闘いをやめてください。

一言、知らせたいことがあります。

老ヒルトプラント殿は亡くなりました。

彼の魂に神の恵みがありますよう。

彼自身の主君が彼を打ち殺したのです。

彼は今、墓地へ運ばれようとしています。

ペルンの人(語る)

私はお前のせいで武術の師匠を打ちのめしたのだが、

その武術の師匠が死んだのなら、

お前にもよいことは起こるまい。

私の攻撃を防ぐがよい。ようやく私は男となり、

怒りで力が出てきたのだから。

不死身の英雄よ、お前は死なねばならぬ。

(そこで再び互いに打ち合う。ゾイフリートはうしろに退

き、ついに王妃の膝に逃げ込む)

王妃(彼の上に薄い布を投げかけて、語る)

(九五〇)

(九五五)

(九六〇)

(九四五)

(九四〇)

ペルンの人よ、あなたは徳高き勇士です。

(九六五)

ですから、今日のところは私の主人を自由にさせてください。

主人は私の膝に倒れているのですから。

どうか彼の生命を助けてください。

主人は今やあなたの捕虜となりましょう。

(九七〇)

デイトトリヒ・フォン・ペルン(怒って語る)

いや、駄目だ。神かけて、そうはならぬ。

私の師匠ヒルトプラントは死んだのだから、

彼も生かしておけぬ。

その嘆願も申し出も役には立たぬ。

(彼は剣を引き抜き、彼を突き刺そうとする)

老ヒルトプラント(やって来て、語る)

(九七五)

わが主君デイトトリヒ様、怒りをしずめなされ。

私はまた生き返ったのだから。

私が死んだことをあなたに知らせたのは、

あなたの怒りに火をつけ、

あなたの中から火と蒸気が出てきて、それによって

あなたが闘いに勝つよう仕向けるためだったのです。(九八〇)

ペルンの人(振り向いて、語る)

お前がまだ生きていて元気だとは、

このときに神の祝福があれ!

誰にとっても平和が訪れよう。

私は騎士として勝利を収め、

賞賛をここで闘い取ったのだから。

(九八五)

(彼はゾイフリートの手を取って、立ち上がらせる)

ゾイフリート(語る)

デイトトリヒ殿、徳高き男よ。

私の生命を助けてくれたことに感謝いたす。

君の力を私はたった今、思い知った。

君の誠実もよく分かった。

君の友情が私にはとてもうれしい。

(九九〇)

王妃(彼の手を取って、語る)

デイトトリヒ殿、親愛なる殿よ。

バラの冠とさらにそのうえ、

私の抱擁と口づけをお受けください。

(彼女は彼に冠を被せ、抱擁し、口づけをする)

デイトトリヒ・フォン・ペルン(語る)

(九九五)

闘いの苦勞の甲斐があったというものじゃ。

私は婦人の奉仕に浴しているのだから。

さて、我々は再びペルンへ帰ることにしよう。

今も、今後もそしていつまでも

神の祝福がありますよう。

神により君は喜びとともに生きますよう。

不死身のゾイフリート(語る)

私たちは君にお伴をつけることにしよう。

そして私たちの間で今後とも

互いに親しく語り合うことにしよう。

(一〇〇〇)

私たちが決闘でどのように闘ったかを。

(彼らは皆、立ち去る)

第七幕

(クリームヒルトの三人兄弟であるギユンター、ゲールノート及びハーゲンが入って来る)

ギユンター(語る)

よく聞け、わが親愛なる兄弟たちよ。

我々は義兄弟ゾイフリートによってすっかり侮^{あな}られてしまっている。

彼は我々皆を尊敬していないのだ。

我々の妹は彼を婿に選び、

彼は我々の老父ギービツヒに対して

嘲笑しつつ振舞い、

我々息子を力づくで押し退けているのだ。

彼が事を見ごとにやっつてのけると、

我々は馬鹿者扱いされるのだ。

まるで我々は国王の息子ではないかのように。

次男ゲールノート

兄弟たちよ、我々は勇敢ではないので、

このゾイフリートを追い出すこともできない。

だからといって、そのような強力な味方を抱えた

彼を宮廷にとどまらせておくのか？

遅かれ早かれ、

我々の父上はそのうちに亡くなるだろう。

そうしたら彼はきつと国王になりたがるだろう。

というのも、彼はすでに国王の支配権を

ほぼ半分も手中に収めているのだから。

彼をどうしたらよいか、教えてくれ。

三男ハーゲン(語る)

彼は我々の妹を妻にしている限り、

追い出すわけにもいかない。

彼には王者たる風格が漂っている。

我々のうちの一人がただちに

彼を戦いに誘い出して、

彼の幸運を欺いて、

戦いの最中に彼を打ち殺してはいかがだろうか？

そうすれば我々は名誉を保って彼を片付けられるのだが。

長男ギユンター(語る)

それを私も考えていたところだ。

しかし誰が彼と戦うのか？

彼の皮膚は上下とも、

前後ともすっぴり角質だから、

彼は戦いでは倒されえないのだ。

ただ肩の間だけは

二指尺の幅だけ傷つけられる。

そこだけが彼を打ち負かす箇所なのだ。

(一〇二〇)

(一〇二五)

(一〇三〇)

(一〇三五)

(一〇一五)

(一〇一〇)

(一〇〇五)

(一〇四〇)

次男ゲールノート

長いこと私もそれを考えていた。

兄弟たちよ、ゾイフリートはいつも昼に森へ

散歩に出かけるといふことは本当だ。

彼はある冷たい泉のほとりで、

草地の美しい花の中に横たわって、

そこで一人で寝たり、うたたねしたりするそうだ。

そのときなら彼をこっそりと突き刺すことができよう。

宮廷では名譽を保って、人殺しが

それをしたのだと言ひ触らすことにしよう。

三男ハーゲン（語る）

兄弟たち、その提案を受け入れることにしよう。

我々はしかと彼を見張り、

泉のところでは彼を監視して、

そこで私が彼を突き刺し、

三人兄弟の仇を討つことにしよう。

ギユンター（語る）

では、我々は誓いを交わすことにしよう。

私とお前たち二人、

ゲールノートと弟ハーゲンの間で。

（彼らは指を抜き身の剣の上に置く）

ハーゲン（語る）

では、殺害行為をするのは私だが、

皆静かにそれを黙っていてくれ。

今日中にも私が事を終えてやろう。

（彼らは皆三人とも、立ち去る）

不死身のゾイフリート（王の装いでやって来て、すわり、

語る）

私は泉のほとりに横たわろう。

この太陽の木陰で、

草地の菩提樹の下に。

草の芳しい香りを嗅ぎながら、

静かに休むことにしよう。

私の目は何と穏やかなことか！

（二人兄弟はやって来て、二人がゾイフリートを指さす。

ハーゲンが忍び寄って、肩の間を突き刺し、短剣を投げ捨

てる。ゾイフリートは少しよろめき、そのあと静かに横た

わる）

義弟ハーゲン（語る）

今やお前の高慢も最期を迎えた。

我々をもはや惑わすこともないのだ。

さて、我々は宮廷に知らせよう。

ゾイフリートが泉のほとりで

人殺しによって殺害され、

一人の獵師が彼を発見したのだと。

（彼らは柴で彼を覆い、立ち去る）

王妃クリームヒルト（伝令官と獵師とともに入って来て、

（一〇六〇）

（一〇四五）

（一〇五〇）

（一〇五五）

（一〇六五）

（一〇七〇）

語る)

宮廷に入った知らせによると、

わが愛しい夫は

(一〇七五)

冷たい泉のほとりで倒れていたということだ。

そうでないことを望んでいるのだが。

彼女(小枝を取り除き、語る)

あそこにわが愛しい夫が倒れ死んでいる。

嘆き給え、親愛なる神よ!

彼女(彼の上にくずおれ、彼を抱き締め、口づけして、語る)

(一〇八〇)

ああ、心から愛するわが夫よ、

あなたは真心から私のために

自らの生命を死の危険に晒して、

私を苦境から救い出してくれたのに!

暗殺した者は呪われよ。

(一〇八五)

あなたを最後に殺し、

眠っているあなたを突き刺した者は。

神が欲せば、復讐されないのではいまい。

彼女(死人を見つめ、彼を抱き起こし、彼を見て、語る)

短剣があそこに落ちていて、

血で赤く染まっている。

(一〇九〇)

私の夫を暗殺したのは

私の兄ハーゲンで、兄弟たちと一緒に

限りなく大きな嫉妬と憎悪を抱いていた。

夫がいつも身につけていた

美德と実直のゆえに。

(一〇九五)

夫はまた街道筋を清らかにきれいに維持し、

不正を大小にかかわらず裁いてもいた。

この暗殺に対しては私が死ぬ前に

自らの手で私の兄弟たちに復讐して

やろう。そのために私も死ぬことになるう。

(一一〇〇)

こうして戦いはすべて破滅に終わるのだ。

さあ、遺骸を運んで、

王者らしく埋葬してあげよう。

今や私は一人ぼっちで、

私の生命ある限り、

(一一〇五)

苦しみを担い、未亡人でいなければならない。

(彼らは死人を運び去り、王妃は悲しそうにそのあとをつ

いて行く。その後、皆整列する)

伝令官(締め括る)

以上の通り、皆様方は動作と言葉の物語を

見て、お聞きになった。

最後に私は皆様方に

登場人物の性格をまとめることにしよう。

(一一一〇)

まず最初は、ジークムント王。

始末に負えない息子を持つ両親は、

息子のことで悲しく心配し、

息子の行く末を心配している。

第二に、若きゾイフリートは、

よい躰しなも美徳も具えておらず、

大胆で、厚かましく、向こう見ずに

さまざまな危険を冒す。

第三に、侏儒は

奉仕する誠実な男を示している。

第四に、巨人が示しているのは、

移り気で、不誠実な策略を用いる男。

第五に、竜が示しているのは、

すべてのことにおいて

暴瀆と暴力で行う支配は

やがて同じ報いを受けるということ。

第六に、デイトリヒ・フォン・ペルンは

名譽を求めて努力する君主を表わしていて、

やたらと富裕を求めず、

公正で、実直で敬虔さを持っている。

第七は、老ヒルトプラントで、

彼は誠実な宮廷人を思い起こさせる。

彼は一人の君主のもとで暮らし、

誠実に行動し、賢明な忠告をする。

第八に、美しい女性クリームヒルトは

多くの高慢なものへの

情熱を駆り立てる女性を表わしていて、

(一一一五)

それが多くの災いをもたらす。

第九に、彼女の兄弟たちは、

嫉妬と憎しみを抱いていて、

それが多くの災難を引き起こす人物である。神が

我々を護ってくれますよう、ハンス・ザックスは願っている。

(一一四〇)

(一一二〇)

悲劇への登場人物

一 伝令官

二 ニーダーラントのジークムント王

三 その息子、不死身のゾイフリート

四 デイトリープ } 王の二人の顧問官

五 ホルトリープ }

六 ライン河畔ヴルムスのギービツヒ王

七 その国王の娘クリームヒルト

八 デイトリヒ・フォン・ペルン

九 その武術の師匠ヒルトプラント

十 侏儒王オイグライン

十一 巨人クペローン

十二 火を吐く悪竜

十三 ギュンター

十四 ゲールノート

十五 ハーゲン

三人兄弟

(一一三五)

(一一三〇)

十六 鍛冶屋
十七 鍛冶屋の下僕

一五五七年九月十四日

訳注

- (1) テキストでは第一幕 (Actus 1) という表示に限って記されていないが、便宜上補って和訳しておく。
- (2) ライン河畔ヴォルムス (Worms) の町はテキストではヴルムス (Wurms) あるいはヴルメス (Wurmes) と表示されているが、訳稿では前者に統一しておく。
- (3) 東ゴート族の英雄ディートリヒ (Dietrich) はテキストでは Dietrich, Dietrich あるいは Dierich と綴られているが、カタカナ表示を統一し、また出身地ペルン (Pern) またはペレン (Peren) についてもカタカナ表示を前者に統一しておく。なお、注(6)を参照のこと。
- (4) 武術の師匠ヒルデブランド (Hildebrand) についてもテキストではヒルトブランド (Hiltprant) のほかにヒルテブランド (Hilteprant) という表示も見出されるが、前者に統一する。
- (5) 侏儒オイグライン (Ewglein) はオイゲライン (Ewgelein) と綴られているが、前者に統一しておく。
- (6) ヴェルシュラント (Welschland) のペルンとはイタリアのベローナ (Verona) の Wulp である。

- (7) ここに名前を挙げられているファゾルト王 (Fasolt)、エッケ (Ecke)、リュエツ (Ruez) をして巨人ジゲノート (Sigenot) は、すべてディートリヒ伝説に登場する人物である。ちなみに、女巨人リュエツはファゾルト王の従姉妹である。

あとがき

本稿はハンス・ザックス(一四九四―一五七六)の悲劇『不死身のゾイフリート』の全訳である。底本には Hans Sachs: Der hürnen Seufrid. Tragedie in sieben Acten. Halle a/S. Max Niemeyer 1880. を使用し、また Joseph Kürschner (Hrsg.): Deutsche National-Literatur, 21. Band. Hans Sachs' Werke. Zweiter Teil. の脚注を随時参照した。なお、固有名詞の翻訳にあたってはできるだけ原文に忠実に表示することを原則としたが、二つ以上の表記があるものについては、注にも記しておいたように、カタカナ表示を統一したことをお断りしておく。

ハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』は、正式な題名を『登場人物十七名の悲劇・不死身のゾイフリート』全七幕 (Ein Tragedj mit 17 personen: Der hürnen Seufrid, vnd hat 7 actus.) といひ、作者自身が作品の末尾に記している制作年月日によれば、一五五七年九月十四日に完成した戯曲作品である。靴屋の親方でもあり、マイスタージンガーでもあった

作者ハンス・ザックスは一五五〇年代には生涯のうちで最も多くの傑作を書き上げ、また一五五五年には職匠歌学校の審判者にもなっていることを考え合わせると、悲劇『不死身のゾイフリート』はまさに作者の円熟期の作品と言ってもよいであろう。この戯曲作品の手法となったと推定されているのが、十六世紀の韻文『不死身のゾイフリート』（本誌第十一号に拙訳掲載）である。しかし作品のところどころには十三世紀初頭の英雄叙事詩『ニーベルングンの歌』の影響も認められ、また第六幕では十三世紀後半以降の英雄文学『ヴォルムスのバラ園』の影響があったことも容易に推測される。ハンス・ザックスがそれらの素材をいかに駆使して自らの作品世界を構築していったかについては、ここで詳しく述べる余裕はないが、拙稿（ハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』徳島大学総合科学部「言語文化研究」第二巻、一九九五年）において詳述しているので、それを参照されたい。ただハンス・ザックスはこの戯曲作品の中にいくつかのニーベルングン伝承を織り込んでいるとはいえ、いかにもそれらの素材を単になぎ合わせただけという印象は否めず、劇的効果もいまひとつで、ニーベルングン伝説特有の悲劇性に乏しいこともまた事実である。ヤーコプ・グリムは「ハンス・ザックスは何一つ虚構しなかつたが、しかし、（読んだものは）すべて書いた」という名言を残しているが、その言葉はハンス・ザックスの多産な創作活動を証明するものであると同時に、他方では彼の作品がすべて類型化され、獨創性に乏しいことをも言い表しており、その創作活動の限界をも

示していると言わねばならないのである。しかし、これは当時としては当然のことであつたらう。否、このようなハンス・ザックスこそ当時は当世風の文学者と言える存在だったのであり、これまで騎士階級の手にとどまっていたニーベルングン伝説は、こうして靴屋の親方でマイスター・ジンガーでもあつたハンス・ザックスの手によって、多少歪められながらも、新しい市民文学の一つとして広く民衆の間に流布するこゝととなつたのである。